



竹内けん
挿絵 あらいぐま

家康、 恋の陣!

椿姫と築山殿と女城主とおぢぢ

試し読み版

2DB
二宮和久・山本真

登場人物紹介



◆ **田鶴**^{たづ}

家康の初恋の女性。通称「椿姫」。
武芸の才に恵まれた男勝りな女武者。



◆ **瀬名**^{せな} (築山殿)^{つさやまどの}

家康の正妻。氣位が高くツンデレで
お洒落が好きなお姫様。

◆ **井伊直虎** いゐ なおとら

瀨名の從姪であり女城主。
井伊家の繁栄に尽くす
凛々しい男装の麗人。

◆ **おこちや**

家康の從妹で後の側室。
三河国池鯉鮒神社の神主の娘で
巫女さんをしている。



◆ **徳川家康** とくがわ いえやす

本を読むのが好きで、
内向的な未来の將軍。
だけと腹心の鳥居元忠
には横暴。

第一章

百舌鳥

007

第二章

政略結婚

051

第三章

桶狭間の戦い

086

第四章

三州錯乱

123

第五章

遠州忿劇

157

第六章

椿咲く城

206

チューツ！ チューツ！ チューツ！

頭の中が真っ白になるほどに興奮した竹千代は、夢中になって乳首を吸引しまくった。

「あはっ、すごい、そんな強く吸われたら、ああ、乳首が取れちゃいそう♪」

左手で竹千代の頭を強く抱きしめた田鶴は、のけぞり甘美な悲鳴をあげる。同時に右手が再び竹千代の逸物を捉えると、しなやかに扱き始めた。

(なにこれ、気持ちいい。おちんちんがすごい気持ちいい……っ!?)

不意に尿意が襲ってきた。マズイと思い止めようとしたのだが、綺麗なお姉さんに捉えられた逸物は、少年の制御を受け付けなかった。

ドビュビュビュビュ!!!

(ああ、なにこれ……気持ちよすぎる……)

田鶴の手の中で、竹千代は魂を抜かれるような心地がした。足腰から力が抜けて、膝と両手を大地について四つん這いに崩れ落ちた。

「うふふ、いっぱい出したわね」

虚脱状態の少年を足下に見下ろした田鶴は右手に掬った白濁液を口元に運び、美味しそうに舐めた。

「ご、ごめんなさい」

「ん？」

四つん這いのまま顔をあげ、涙ながらに謝罪してくる竹千代を見下ろして、田鶴は怪訝けげんそうに眉を寄せる。

「あ、あの……おしっこ漏らしちゃって……」

ようやく理由を理解した田鶴は、嬉しそうに瞳を輝かせる。

「もしかしてとは思っていただけ、初めての射精？」

「？」

射精という単語の意味もわからず、竹千代は呆然とする。

まだ性的なことすら知らない少年なのだ、と悟った田鶴は、嫣然と笑うと肩を竦めた。

「いいわ。あたしがいろいろ教えてあげる。手を洗ってこっちに來なさい」

なにがなんだかわからないことだらけだが、いまの竹千代に、田鶴に逆らうという選択肢はない。言われた通りに、田鶴が水浴びに使った桶の水で手を洗った。

「ほら、ここに座る」

田鶴が指し示したのは、濡れ縁の前にあつた草履置き用の御影石であつた。

竹千代がそこに正座すると、その前の縁側に腰を下ろした田鶴は、両踵を縁にかけるとM字開脚になつていた。

「うふふ、女のここ、見たことないでしょ？」

得意げな、それでいてどこか興奮を隠しきれていない田鶴の声に、竹千代は借りてきた

猫さながらに、緊張したていで頷く。

「うん」

「見せてあげるわ」

日焼けした田鶴の顔が赤く火照っているようだ。春だというのに、汗が噴き出している。田鶴は両手で自らの陰毛をまさぐると、中の亀裂をあらわとした。そして、左右の人差し指と中指で、ぐいっと開いてみせたのだ。

牝の匂いがぷくと、竹千代の鼻を打った。

「どお、女の秘密の場所を見た感想は？」

「え、なんと言うか……その」

性的に目覚めていなかったのだ。女性の裸を想像したこともなかった。それなのにあまりにも予想外の光景を見せられて、奥手な少年はなんとも表現に困る。

田鶴のほうは、見られていることに興奮しているようだ。軽く喉を鳴らしてから、いささか焦ったような声を出す。

「まあ、綺麗なところとは言えないわよね。ヌルヌルしているし。あ、これおしっこではないからね。女の蜜よ。それからこの穴は、オマ○コとかホトとっておちんちんを入れる場所だから覚えておきなさい」

「えっ」

「キミの股間でギンギンになっているおちんちんは、このオマ○コに入れるためにそういう形になっているのよ。そして、さつきキミが出したあの白い液体を注ぎ込むと女は懐妊するの」

初めて知った知識に、竹千代は目をまん丸にしている。田鶴は照れくさそうに頭髪を一度掻き上げると、上擦った声で命じた。

「うふふ、この穴よ。指を入れてみなさい」

竹千代は先ほど言われた通りに綺麗に洗ってきた右手の人差し指を、恐る恐る肉穴に近づけた。

ズボリ

太く短い指が、吸い込まれるようにして入った。

「あん♪」

少年の指を咥え込んだ田鶴は、股を開いたまま顎をあげてのけぞる。

（うわ、ヌルヌルでザラザラしている。ここにおちんちんを入れるって？ それは……滅

茶苦茶氣持ちよさそうだ）

初めて指を入れた肉洞を竹千代は、グリグリと掻き混ぜる。

「ああ、そんなに穿りまわされたら……ああ、ちよつと待って、まだ説明することがあるから。ほら、その、その上のほうに突起があるでしょ。そこは陰核っていつて女にとつて

とつても気持ちいい場所なの。そこも触ってみて」

やたらと動揺している田鶴に言われた通り、竹千代は左手の人差し指で陰核を押ししてみた。

「あはっ」

プシュッ

必死に澄ました顔をしているお姉さまの股間から温かい飛沫が溢れて、竹千代の顔にかかった。

「だいたい、その二つが女の急所だから、あとはキミの好きにしていいわ。はぁん♪」

グリグリグリグリ、モミモミモミモミ

綺麗なお姉さんが興奮して喜んでしていると察した竹千代は、真摯な気持ちで右手の人差し指で肉穴を穿り、左手の人差し指で陰核を揉み続けた。

「あぁん、それ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい、やばい。こんな子供にあたし、なにやっているんだろ。あぁ、今度はね、そこを舐めて」

「はい」

いったん指を離れた竹千代は言われた通り、田鶴の陰唇に顔を近づけた。そして、口をあけて、舌を伸ばすと、生々しい赤い肉裂の中身を下から上へと一気に舐める。

ペロリ

「ああっ」

田鶴の甘い悲鳴とともに、竹千代の舌尖にはしょっぱい味が広がった。

しかし、味覚とは別のうまみを感じた少年は、我を忘れて綺麗なお姉さまの局部にしゃぶりつく。

ジュルジュルジュル……

「ああ、そんな啜り飲むなんて、ああっ」

切迫した声をあげた田鶴は、M字開脚のまま両手で竹千代の頭を抱く。

竹千代は鼻の頭に陰核を押し付けられ、舌尖を膣穴に押し込んで掻き混ぜた。

「はぁ～ん♪ それ、気持ちいい♪ 気持ちいい♪ 気持ちいい♪」

竹千代が上目遣いになって見上げると、凛々しくも恰好よかったお姉さまが、頬を紅潮させ、目元を潤ませ、口元を半開きにした、なんともだらしな表情になっている。

（うわ、田鶴さまがこんな表情をするだなんて……）

男勝りの女武者として、凛々しくも颯爽とした顔しか知らなかった竹千代は驚愕し、同時に興奮した。

（もっともつと、田鶴姫に気持ちよくなってもらいたい）

そう考えた竹千代は、夢中になって蜜を啜り、舌を動かした。

ピチャピチャピチャピチャ

「ああ、もうダメ、あたし、こんな子供にイカされちゃう！　もうイク、もうイク、イク、イク、イツちやううううう♪」

ビクビクビク

激しく四肢を痙攣けいれんさせた田鶴は、押さえ込んでいた竹千代の頭を放すと、そのまま仰向けに倒れた。

「はあ……、はあ……、はあ……」

御影石の上で正座する竹千代の眼前で、田鶴は濡れた陰唇を晒しながら、荒々しく大きな胸を上下させていた。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

不安になった竹千代が恐る恐る尋ねると、田鶴は赤毛の頭髪を掻き上げながらけだるげに身を起こす。

「大丈夫よ。気持ちよくイかせてもらったただだから。さあ、続きをしましょう。今度はキミも濡れ縁に上がって、仰向けに寝なさい」

「はい」

田鶴に逆らうことなど露ほども考えられなかった竹千代は素直に縁側に仰向けになった。

「すごい、ギンギン」

天に向かつていきり立つ逸物を、田鶴は愛しげに摘んだ。

「キミの童貞、もらうわよ」

「……」

言葉の意味はよくわからなかったが、竹千代は頷いた。

それを見た田鶴は右足を軽く立てた片膝立ちになって竹千代の腰を跨ぐと、逸物の切っ先を自らの膺穴に添える。そして、軽く息を吐きながら腰を落とした。

ズブリ……

少年の極太の肉杭が、悪カッコイお姉さまの体内へと呑み込まれた。

「はあああ……太い♪ 毛もはえてない子供のくせになんて太いの♪」

田鶴は白い喉を晒してのけぞった。同時に竹千代もまた言語化不能な悲鳴をあげてのたうった。

逸物の先端を包む皮が、ザラザラの肉壁を進んでいるうちに剥けあがってしまったのだ。

ピクピクと震えている少年を、興奮に瞳を爛々らんらんとさせて田鶴は見下ろす。

「どお、女の中に入った感想は？」

「き、気持ちいいです」

泡立った涎を噴きながら竹千代は自らの語彙の不足を悔やんだ。とにかく逸物の先端から溶けるように気持ちいいのだが、それ以外の言葉がでてこない。

あまりの快感に半泣きになっている少年を眺めながら、田鶴は満足げに頷く。

「そう、よかった。それじゃ、動くわね」

宣言とともに、田鶴はゆつくりと腰を前後に動かし始めた。

又チュ……、又チュ……、又チュ……

大きな乳房を上下に揺すりながら、不良っぽいお姉さまが腰を使う。

「あ、あああ……ああああ」

女性の体内で逸物が激流にほんろう翻弄される木の葉のようにもてあそ弄ばれている気分だ。

（あつい、ちんちんが溶けるううううう!!!）

ドビュビュビュビュ!!!

情熱的に踊る女体に包まれて逸物は爆発した。それを察した田鶴は呆れたような表情で溜息をつく。

「あはっ♪ 先に一発抜いたのに、もう出しちゃったの？」

嘲るような笑みを浮かべているが、どこか嬉しそうである。

「ごめんなさい。き、気持ちよくて……すごく気持ちよくて……」

なんだかよくわからないが田鶴に失望させてしまった気がした竹千代は、すごく惨めな気分になって、泣きながら謝罪する。

「うふふ、でも全然小さくならないわね。まだ続けましょう。今度はキミから動いてみなさい」



162

162

162

162

162

162

162

162

162

162

ややあつて怯えたように元康の顔を見る。

「か、硬い。それにこの大きさ。丸太かと思つたわよ。本気でこれをわたじの中に入れて気なの？」

「ああ」

あたりまえに頷く元康の顔を見やつて、瀬名は怯えたような顔になる。

「む、無理。こんな大きいの入らないわよ」

「入るよ」

「いや、無理。裂ける。絶対に裂けるから」

瀬名は焦つた顔で力いっぱい応じる。

「いや、ダメだ。今夜やらないと太守さまに怒られる」

「むー」

逸物を両手で握つたまま瀬名は、双乳をはだけていることも忘れて難しい顔になる。

「そ、それはそうだけど、いきなりこれは敷居が高いというか、やっぱり、こういうのは時間をかけてゆつくりと……その、あ、そうだ。く、口でするから、それで許して」

「口でする？」

困惑する元康に、赤面した瀬名は目を泳がせながら言い訳する。

「腰元に聞いたのよ。男つて口でされても喜ぶつて」



「まあ……」

瀬名の妥協案に戸惑いながらも元康はしぶしぶ頷いた。

「それじゃ、決まりね」

顔を輝かせた瀬名は、改めて男の前で正座となり、うつむき加減になると、右手の人差し指で、ツンツンと亀頭部を突つづいた。

プルンプルンと躍る逸物のさまに、瀬名は失笑する。

「なにこれ、変なの」

右手を肉棒に添えた瀬名は、左手で顔にかかる黒髪を押さえると、うつ伏せになり、恐る恐る逸物の先端に顔を近づけていった。

吐息が亀頭部にかかる。

チラと上目遣いで元康の顔を確認してから、瀬名は薄い紅の塗られた唇を開くと、淡い桜色の舌を出した。チロリと亀頭部の先端を舐める。いったん舌を口内に戻して、難しい顔をする。味を確認しているようだ。

それから改めて詰問する。

「ここに触れたり、舐められたりするのって本当に気持ちいいの？」

「ああ」

「そう」

そっけなく応じた瀬名だが、どうやら自分がやっていることに間違いはないのだ、という自信を持ったのだろう。

先ほどよりも大胆に舌を出し、丁寧に龟头部を舐めまわした。
ペロリペロリペロリ

唾液が溢れて逸物を濡らしていく。

「くっ」

元康は呻き声を漏らしてしまった。

それを聞き、上目遣いで見上げてきた瀬名は、嬉しそうに微笑する。

「うふふ」

気の強い女だけに、男を翻弄するのが気持ちいいのだろう。楽しそうだ。

(ヤバイ、このままでは出てしまう)

本番の前に出してしまうのは、男としてあまり恰好いいことではない気がした。

(元忠の言い分じゃないが、最初にガツンと言わせるためにはここで出したら負けだ) そう判断した元康は、慌てて瀬名を逸物から引き剥がした。

「そこまで」

「えっ」

戸惑う瀬名を布団の上に仰向けに倒す。

瀬名は絶世の美少女ではあるが、武芸に關しては武家の子女としての平均的な技量しかない。それに対して、スパルタ教育で武芸を仕込まれた元康には一日の長がある。

元康は、有無を言わずに瀬名の両足首を持って、左右に開かせた。

バサツと白い一重の着物の裾が開ける。

瀬名の上半身は腰帯まではだけている。今度は下半身が腰帯まではだけたことになる。

両足首を瀬名の顔の左右に押し付ける。股間部を押し上げさせた姿勢。俗に言うマンガり返しの体勢に固定した。

この時代の女性は基本的に下着をつけない。着物の裾が開けるような特殊な力仕事をしている女や、田鶴のように馬に乗る女は着物の裾が開けたときに中身が見えないように禪をつけることもあるようだが、これは特殊な事例だ。たいていはノーパンであるから、農作業などをしているとき、着物が捲れると大事なところが簡単に見えてしまうことは珍しくなかった。

また、経済的な余裕がある女は、湯文字といわれる腰巻のような下着をつけていた。

これは隠すことが目的ではなく、高価な着物の裏地を汚さないための処置であろう。

瀬名もまた白い湯文字をつけていたが、これは薄手の巻きスカートのようなもので、あつさりはだける。

「ちよ、ちよっと、この恰好って……」

白い一重が捲れて、白い両足の根元まであらわとなっている。

ぷっくりとした土手高の恥丘の上に、うっすらと柔毛が生えていた。

どんなにお洒落なお姫様でも、肛門もあれば生殖器もある。

興奮した元康は、左右の指を肉割れの左右に添えて、割り開く。

桜色の隠花が開き、ぷくん、とした牝臭が香る。

田鶴の匂いより何倍も濃いようだ。いわゆる処女臭というやつだろう。

「おまえだつて触ったんだからいいだろ」

「それは……だけど」

「足、自分で持ってる」

元康の命令に、瀬名は素直に従い、自らの両足の膝の裏を、それぞれの両手で抱えた。

羞恥に顔を真っ赤にした気の強い少女の顔と、生々しい生殖器のギャップを楽しみなが

ら元康は、右手の人差し指を、ホトの中に入れて、贅肉を掻き混ぜる。

クチュクチュクチュ……

「あ、ああ……ダメ、そんな音……あん」

包皮に包まれた陰核に触れると、瀬名の下腹部はビク、ビクビクと痙攣した。

「ここ気持ちいいの？」

「そ、それは……き、気持ち、いい」

赤面しながらも瀬名は素直に認めた。

「すげえ、トロットロの蜜がとめどなく溢れているぞ」

田鶴よりも明らかに液量が多い。感動した元康は、不意に忙しくうごめかしていた右手の人差し指を離した。指先と陰阜の間で、ヌラーと光る糸が引く。

「イヤッ！ やめて」

自らの愛液の粘りを見せつけられた瀬名は、慌てて顔を背ける。

その水草の一つ一つがたまらなくかわいい。もつともつと瀬名のかわいい顔を見たいと思つた元康は、瀬名の陰部に顔を埋める。

「ちよ、ちよつと、どこに顔を埋めているのよ、そこ不浄な場所よ、ああ、なに舐めているのよ。そんな、ダメえええええ」

慌てふためく瀬名を押さえつけ、元康は存分に舌を動かす。

ペチャペチャペチャ……

「ひい、ひい、恥ずかしい。こんなの恥ずかしすぎるわよ。ああッ」

瀬名の羞恥の悲鳴を楽しみながら、その垂れ流す樹液を貪る。まるでカブトムシになった気分だ。

元康は思いつきり音を立てて啜る。

ジュルルルル……!!!

「ひい、やめて、飲まないで！」

当初は羞恥に悶絶していた瀬名だが、無理やり舐められているうちに、羞恥心を超える、肉体的な快楽に襲われたようだ。

「はあ、はあ、はあ……」

男に身を預けて、すっかり惚けてしまった表情になっている。

生氣に輝かしていた目は虚ろで、花びらのように可憐であった唇は半開きとなり、口角から溢れた唾液が、顎を濡らしている。

(すげえ、瀬名のやつがこんな表情をするなんて……)

いつも元気で姦しい少女とは思えない。彼女のこんな無防備な表情を見たことがあるのは自分だけだろう。

逸物が疼く。

(これは俺の女だ。ぶち抜きたい)

そんな牡としての独占欲に支配された元康は、貪っていた陰華から顔をあげた。

「……」

いきなりの快感の中断に、瀬名は驚いたようだ。我に返って元康の顔を見る。

その視界に、いきり立つ肉棒が広がった。

「入れるぞ」

「くっ……、わかったわよ。好きにするといいでしょ」

逸物の大きさを畏怖している瀬名だが、勇を鼓して頷いた。

そこで濡れそぼった女唇に、極太の逸物の切っ先を添える。

その光景を見て、瀬名は頬を引きつらせた。

「あ、あの……、やっぱり、大きすぎるといっつか、わたしにはまだ早いといっつか」

「ダメだ」

瀬名の練り言は無視して、元康は腰を落とす。

膣口が広がり、亀頭部が埋まっっていく。

ぐっ

止まった。切っ先になにかが当たっている。

細い足を痙攣させた瀬名は、絞殺されんばかりの悲鳴をあげた。

「や、やっぱ無理。痛い。痛いつて！」

目元に涙を溜めた瀬名は必死に、元康の胸を押し退けて逃れようとするが、体重が違う。

瀬名の体のほうが動く。

元康はそれを追いかける。

「痛い、痛い、痛い」

瀬名は必死に逃げた。いわゆる処女のずりあがりである。

死力を尽くして逃げた瀬名は、ついに布団の外にまで出てしまったが、そこで限界に達した。

ゴン

瀬名の頭頂部が、部屋の壁に当たったのだ。直後に逸物が入った。

プチン！

乙女の最後の砦が破れて、荒々しい肉槌が押し込まれる。

「ひいぎつ!!!」

悲痛な悲鳴をあげた瀬名は、両腕で元康の肩をぎゅっと抱きしめてきた。同時に腔洞も信じられない勢いで締め上げてくる。

「うお」

元康もまた驚きの悲鳴をあげてしまった。ブツブツとした腔壁が肉棒に絡みついてくる。(こ、これは滅茶苦茶気持ちいい)

我を忘れた元康は、破瓜直後の新妻を氣遣う余裕もなく、瀬名の白い両足をそれぞれの肩にかけて腰を荒々しく動かしてしまった。

「そ、そんな激しくされたら！ 奥がズンズンされて！ ああ♪」

若く鍛え抜かれた牡の、有り余る体力で力の限り掘削されるのだ。

哀れなるウサギには、逃れるすべはない。





家康の左横に泰然と座った西郡局は、いかにも武芸の達人といった容姿であり、背も四人の中で一番高い。

鍛え抜かれた筋肉質な体は、年齢が一番若いこともあって、子供を産んだことがあるなどと信じられぬほどに引き締まっていた。

「家康殿の妻であられる方々が一堂に会された場所に、わたくしなどが侍つてよろしいのでしょうか？」

家康の左足元に座った直虎は、いささか不安げな声を出す。

青白いほっそりとした体軀をしている。普段は隙なく男装の麗人をしているせいで育たないのかと、邪推したくなるほどに乳房は一番小さい。女城主などといっても、根は僧侶なのだということがわかる。

「当然でしょ。あなただつて殿のお情けを賜っている身なのですから」

瀬名はなにをいまさらといった顔で応じる。

女たちは互いの裸体を値踏みするように見やったあと、ごく自然と家康の腰へと視線を下ろす。

四人の女の裸体を仰ぎ見る眼福を堪能している家康の腰のものは、当然のようにギンギンにいきり立ち、天を衝いていた。

やがて熱い嘆息とともに咬いたのは直虎であった。

「いつ見ても大きいですね」

女王様然とした瀬名が頭髪の鬢を整えながら応じる。

「この人のここだけは天下第一ですから」

「そうですね。このおちんぼさまの前では、女は股を開くことしかできません」

西郡局はごく真面目に頷く。そんな女たちにおこちゃが反論する。

「そんな顔だつて悪くないですよ。殿は美男子です」

残念ながら他の三人の女は賛同せず、さりげなく目を逸らす。

ややあつて瀬名が応じる。

「まあ、味のある顔としておきましょう」

それに西郡局も焦つた顔で応じる。

「そ、そうですね。男は顔ではありませんから」

「け、健康な殿方が一番です。徳川殿の体に抱きしめられると安心感があつてわたくしは

好きです」

慌てたように取り繕つた直虎は、眼下の逸物に手を伸ばした。

それを見た他の三人も手を伸ばして、逸物を捕らえる。そして、四人は愛しげにシコシ

コと扱ぐ。

ややあつて西郡局が、ニヤリと笑う。

「しかしまあ、あたしたちはこのおちんちんが大好きだ、ということだけは満場一致しておりますわね」

「はい」

「……恥ずかしながら」

「そうですわね」

満面の笑みでおこちゃは頷き、静かに同意する直虎に続いて、瀬名もしぶしぶといった顔で頷く。

それから瀬名は一同を見渡す。

「せっかく今夜はこうやって四人で楽しむのですから、ゆつくりと趣向を凝らして楽しみましょう」

「ええ、たつぷりと……骨の髄まで」

西郡局は精悍せいこんに頷き、他の女たちも逸物を手に舌なめずりをするさまを見て、家康はいまさらながら不安になってきた。

（こ、これはもしかして、死地に入ったか？）

四人ともはや生娘ではない。瀬名は二人、西郡局は一人の子供を産んでいる。直虎とおこちゃはまだ産んでいないとはいえ、家康にたつぷりと開発され、女として脂が乗りきっている。

「いづれの女と床を共にするときでも、寧丸をすつからかんになるまで搾り取られるのが常であった。

それが四人同時、しかも競いあつて男を搾りにきたらどうなるか？
(殺されるかも……)

家康は背筋に冷たいものが流れるのを感じたが、いまさら遅い。

「まずはじっくりと味わいましょう」

妖艶な顔を見渡した四人の美姫たちは、だれからともなく逸物に顔を近づけた。家康の顔を横目に見下ろしながら、ギンギンにいきり立っている逸物に舌を伸ばし、亀頭部をペロリペロリと舐める。

「ああ……」

四枚の濡れた舌が交互に亀頭部を捕らえる。

右上から瀬名、左上から西郡局、右下からおこちゃ、左下から直虎の舌が、亀頭部を執拗に舐めまわした。

先走りの液は、女たちの舌尖でたちまち舐め取られ、代わって唾液を塗りたいくられる。

パンパンに張り詰めた亀頭部は、四種類の唾液に濡れて、さらに肉棒を滴り落ちて、肉袋をも濡らす。

「うふふ」

どの女も楽しげに舌を動かしながら、横目ではしつかりと男の顔を見ている。
(き、気持ちいいが、ここでだらしない顔をしては、男としての威厳にかかわるな)

変なプライドを刺激された家康は、必死に顔の筋肉を引き締める。

そんな男の演技など全部お見通しと言いたげな顔をした女たちは、まるで相談したかのように協力して家康の両足を持ち、頭上へと持ち上げてきた。

「な、なにをするつもりだっ!!」

動揺する家康など意に介さず、気が付いたときには赤ん坊がオシメを替えられるような姿に固定されていた。俗に言うチングリ返しだ。

「うふふ、こうすると殿も、督姫みたいでかわいいですわね」

西郡局の感想に、瀬名は嗤う。

「それはさすがに無理があるでしょう」

「ええ、それを聞いたら、成長した督ちゃんが傾奇者になってしまいますよ」

おこちゃも真面目にたしなめるが眼が笑っている。そして、一同は笑顔で逸物に顔を近づけてきた。一人は亀頭部を咥え、一人は肉棒を横咥えにし、一人は睾丸を含み、一人は肛門を舐めてきた。

だががどこというわけではない。四人は阿吽の呼吸でそれぞれの位置を替えている。

「ひっ」

男の急所を、美しき四匹の牝獣に食べ散らかされている気分だ。

悶える夫を妖しく見下ろしながら瀬名は、挑発してくる。

「あなた、我慢してくださいね。十代の小僧と違って、もはやいい大人なのですから、暴発などさせたら、思いつきり嘲笑って差し上げますわよ」

「なにを言う、わしがいま、世間になんと呼ばれておるか知らぬのか、東海一の弓取りだぞ。この程度で音をあげるわしと思つてか」

家康の強がりにも、瀬名は肩を竦める。

「養父さまの異名を継承されてようございましたね」

そこにおこちゃが歓声をあげる。

「タマタマが二つとも、きゅつとあがつていきますわ。これは射精を我慢している証ですね」
「ほお、そうなのですか。勉強になります」

三人に比べるとまだまだ男の生態がよくわからないらしい直虎は、真面目な顔で頷く。
「くー、我慢我慢我慢……」

逸物を女たちの玩具にされて、射精欲求はかなり高まっているが、家康は胸中に念仏のように「我慢」と唱えながら耐え忍んだ。

そして、家康は我慢比べに勝利した。やがて飽きたらしい瀬名が新たな提案をする。
「では、そろそろ次に移りましょう？」

家康は腰の下に丸めた布団を入れられて、頭上に掲げられていた両足を降ろされる。そうすると家康の腰が上がり、女たちの唾液に濡れた逸物が一段と高く飾れる。

「ちよ、ちよと待て、おまえらなにをするつもりだ」

男にとつてはいささかつらい体勢である。家康は逃げようとしたが、無理であった。

右腕には瀬名が、左腕には西郡局が、右足にはおこちやが、左足には直虎が跨がっていたのだ。

そして、みな自らの自慢の乳房を両手にとつて持ち上げてみせた。

「おっぱい相撲と洒落込みましょう」

瀬名の音頭に従つて四人は、それぞれ自分の乳房を押し出して、家康の逸物に四方から近づけた。

合計八つの乳房によつて、逸物は囲まれる。

四重パイズリ。……とはいえ、さすがにすべての乳房で逸物を挟むのは無理がある。みな乳首の先端で、交互に亀頭部などを突つていく。

乳房の大きさをいえば、おこちやが一番大きい。二番目が瀬名。三番目が西郡局。一番小さいのが直虎となる。

おこちやの体は女としては普通。いや、小柄な体型であろう。顔も童顔。それなのに乳房だけは大きいから、より一層大きく見える。

「おこちゃ殿は、まだ子供を産んでいないのですよね。それなのにその大きさはすごいね」
感嘆した西郡局の感想に、おこちゃは照れたように両腕の肘で自らの巨大な肉まんを左右から挟みながら、両手で火照った頬を押さえて、身をくねらせた。

「子供のころから家康さまに揉んでもらっていたら成長してしまいました」

おこちゃの照れながらの自慢話に、周りの女たちはカチンとくる。それと気づかずにおこちゃは思い出話を続けた。

「家康さまは織田さまの人質時代、わたしをお風呂に入れてくれたときも、体を洗うふりをして、おっぱいに触れていた、と於大さまから聞いております」

「へえ」

他の三人の女たちの家康を見下ろす目が底光りした。

「いや、さすがにそれは記憶にないぞ」

それは作り話だろ、と言いたくなかったが、笑顔のおこちゃはチロと舌を出す。

場を盛り上げるための他愛のない戯言といったところだろう。

侍女として身の回りの世話をしてくれているおこちゃは、なんだかんだ言つて一番身近にいる女である。女の乳房は男が揉むほどに育つという俗説が真実ならば、おこちゃの乳房が大きく育つた原因は間違いなく家康にある。

ややあつて直虎が、間を取り持つように声を出す。

「男と女の仲は、長さではありませんからね」

「そうですね。下手に馴染みすぎると、なかなか一線を越えられなくなるものです」

瀬名の言葉は、おこちゃがいまだに身籠っていないことをあてこすっているのだろう。

そんな雑談をしながらも、彼女たちのよく実った乳房が、逸物を交互に挟んでくる。

「おお……」

大きさも柔らかさも違う乳房に肉棒は挟まれて、扱かれるのだ。さらに乳の狭間から飛びだした龟头部に、向かいの女が舌を伸ばし舐めた。

つまり瀬名の乳房に挟まれているときには、向かいの直虎が舐め。西郡局の乳房に挟んでいるときは、向かいのおこちゃといった具合である。

(こ、これは極楽すぎる)

柔らかい肉と唾液の海に包まれて、ついに家康は屈した。

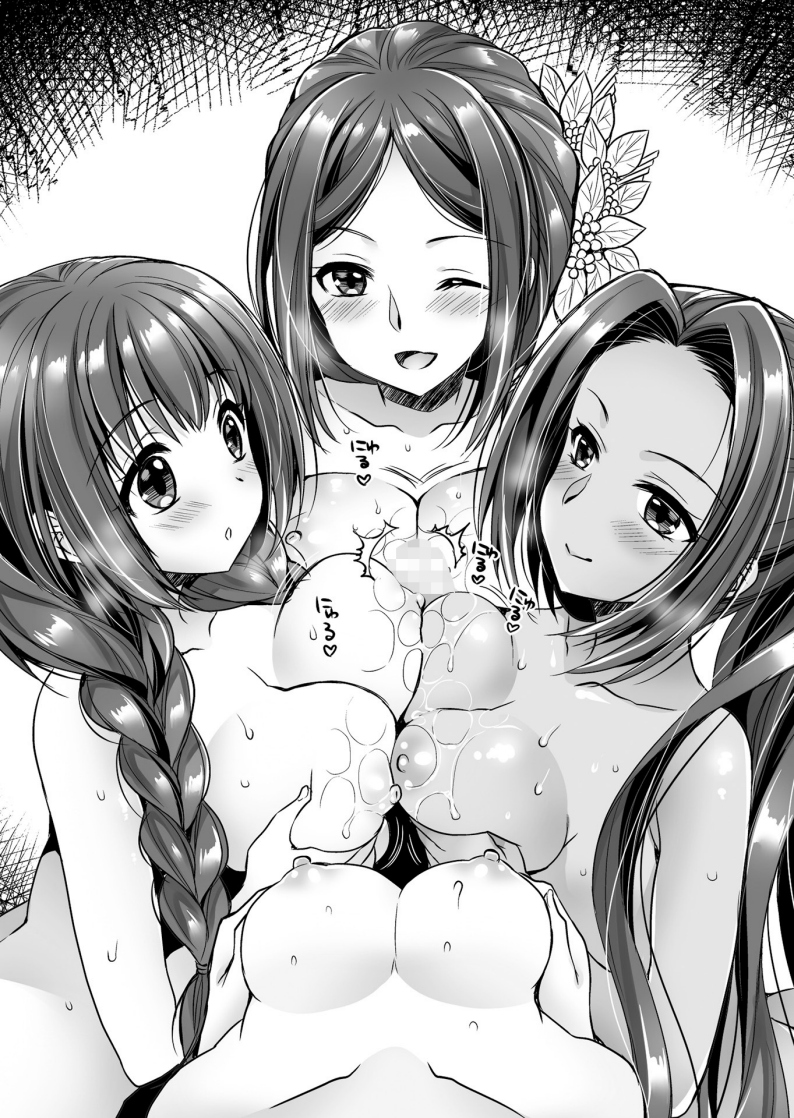
寧丸から溢れた熱気が、乳房に包まれた肉棒を駆けあがり、先端から一気に噴き出す。

ドビュユユユユユ!!!

女たちの乳房の中で、逸物は爆発した。

「キヤー~~~~~♪」

昇竜のように飛び上がった白濁液が、驟雨しゅううの如く降り注ぐさまに、四人の美姫たちは歓声をあげる。



女たちの顔は真つ白になり、それを見て笑いあつた女たちは、互いの顔をペロペロと舐めあう。

「きや、くすぐつたい♪」

戯れている女たちを脱力した家康は荒い息をしながら、心地よい充足感とともに見守る。

「はあ……、はあ……、はあ……」

やがて顔や乳房にかかった乳房をあらかた綺麗にした瀬名が、惚けている夫を見下ろす。「あら、なんですよ。このだらしのないおちんちん。まだまだ始まつたばかりですよ」

家康は肩を竦めて、言い訳する。

「すごいのをやられてしまったからな。少し休ませてくれ」

「まあ、だらしがない。あなたは絶倫なのが唯一の取り柄でしたのに」

そこでいったん言葉を切つた瀬名は、わざとらしく周りの女たちを見る。

「年は取りたくないですわね。結婚した当初はもう一日中、猿のようにやられて、ほんとうに参りましたけど」

瀬名の言い分は、愚痴という形をとつた自慢話であろう。先ほどのおこちやの言動に対するあてこすりであることは明白だ。

それを聞いた他の女たちの目が、いささか険悪になっている。

「まあ、仕方ないですわね」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>